

akakilike

眠るのがもったいないくらいに楽しいことをたくさん持って、
夏の海がキラキラ輝くように、緑の庭に光あふれるように、
永遠に続く気が狂いそうな晴天のように

鼎談

倉田 翠 (akakilike 代表 演出)

×

白神ももこ (キラリふじみ芸術監督)

×

田上 豊 (キラリふじみ芸術監督)

自分が見たい・面白いと思う表現のためにダンスを使う

白神 実は倉田さんとは「コレがきっかけ！」というはっきりした出会いではなく、気づいたら知り合っていたんですね。

倉田 そう、友達のダンサーが白神さんの作品に出たり、もっと遡ると横浜でのショーケース公演でグループが一緒だったり……という。ちゃんと挨拶をしたことはないのでは？

白神 それはあります！ 横浜の ST スポットの楽屋で名乗り合ったでしょう？

倉田 あぁ……もう 10 年近く前ですね。その時の、白神さんの作品の印象は残っているけれど、挨拶したことは覚えてないなあ。

白神 (笑) 宝塚歌劇団のパロディみたいな作品だったんですが、それを観て「私たち似てると思う」と倉田さんから声をかけてくださったのに。

倉田 や、「似てる」とはかねがね思っていて、根底にあるものが白神さんと私は近い気がしているのは本当です。

白神 創作過程でこだわること、フェティッシュな部分は似ているけれど、作品の中での表現・表出の仕方は異なるんですね。

一 キラリふじみは今、ダンスの白神さんと演劇の田上さん、二人の芸術監督がそれぞれの創作・表現を活かした事業を行う会館です。そこに、近年の作品ではダンスと演劇両方の要素が有機的に混じり合っている倉田さん率いる「akakilike」の公演があることで、どんな化学反応が起こるか期待が募ります。

倉田 「自分はダンスの人だ」としつこく言ってはいますが、ダンスはたまたま子どもの頃からやっていただけのことで、自分がつくったものを「ダンス作品」という枠にはめたいとは一切思っていないんです。今回の『眠るのが〜』の出演者は、京都ダルクという薬物依存症のリハビリ施設の入所者さんがほとんどですが、その方たちにダンスを覚えてもらって、ということも一切ありません。メンバーには踊るより、もっと良い状態で舞台に立つやり方が別にあって。敢えてダンスに回収せず、正直なままを観ていただきたいんです。

白神 倉田さんが仰ったことは、私が自分のカンパニー「モモンガ・コンプレックス」を立ち上げた時に考えたことに近いです。ウチは“ダンス・パフォーマンス的グループ”を名乗っているんですが (笑)。

倉田 “的”なんですね (笑)。

白神 ええ、「ダンスを使って表現する」というスタンスで、必要なければダンスは使わなく

てもいい、と。舞台上のパフォーマーたちが寝たままでいようが、面白ければそれが一番だということ、似ていますよね？

“語り切れない”ことが作品の本質に繋がっている

一 田上さんも今秋、女性だけのダンスカンパニー「プロジェクト大山」の公演に、脚本・構成・演出で参加しています。演劇とダンスを横断する創作はいかがでしたか？

田上 今年、振付家やダンサーの方とクリエーションを共にする経験に恵まれました。普段は俳優との作業が圧倒的に多い中で、ダンサーという“身体で表現を生き抜いて来た人”と向き合うことで、今までの創作経験にない感触を得ました。だから今回も、倉田さんの作品に向き合うことで、僕自身がどんな感覚になるか非常に楽しみにしているんです。

今日たまたま、鼎談の前に教えている埼玉の大学で授業があって。学生たちにも是非『眠るのが〜』を観て欲しいと思って話し出したものの、作品についてどう伝えるべきか、一言では語り切れなかったんです。でも、その語り切れないことがすごく重要な気がして。

白神 それ、とてもよくわかります。

田上 キラリでしか観られない、しかも日常ではできない体験ができる作品なのは確かで、言葉を超えて自分の目で観て身体で感じるしかない作品だということだけ、学生たちには伝えて来たんですが。

倉田 田上さんが、『眠るのが〜』をそういう感覚で捉えてくださるのが、とても嬉しいです。この作品を「ウチでやって欲しい」と言ってくださったこと自体、まず英断だと思うんです。昨年、自分たちの主催で東京公演は行いましたが、東京の、他の劇場さんからお声はかからなかった。田上さんの仰る“説明のできなさ”の一部だと思いますが、ダンサーでも俳優でもない『眠るのが〜』の出演者たちに対峙することに、怖さを感じる人は少なくないと思いますから。

でも良いダンサーは良い役者になり、良い役者は良いダンサーになるというのが私の実感で、田上さんも演出家だから同じ感覚をお持ちだと思いますが、その「良い」という感覚が何か考えた時に、私はたまたま京都ダルクの方たちと出会い、「私の作品に出るのに良い人たちだ」と思った。ダンサーや役者と同様に、面白い人は面白いパフォーマーになれると思うし、私の作品にとって必要な人たちだから出てもらっているんです。

もう一つ、田上さんの言う“語れなさ”の部分に、出演者が薬物依存症だということは作品に降りかかって来るけれど、依存症のことなどは、自分で経験がないのに語ってはいけないのではという感覚が多くの方にあると思うんです。私がどうあの人たちと関わって、作品に出演してもらっているか。私にとっては社会奉仕活動でも、彼らの回復のためのプログラムでやっているわけでもないという事実が、語りにくい部分かなと思っています。

田上 今日話した学生たちは舞台芸術を学んでいるので、今、倉田さんが仰ったような出演者についてのことや、創作過程に考えたことなどには特に興味があると思います。

倉田 私の稽古では、相手がダンサーでも俳優でもダルクの人たちでも、とにかくメッチャ喋るんです。驚くような出来事やオチもなくいい、ただ、その人が日常で出会ったり感じたりしていることが聞きたい。そこで何を見ているかという、喋りや内容の面白さではなく、何をチョイスしどういう喋り方をするかから、その人の「普段」を知ろうとしているんです。その先に、その人にどんな振りや言葉を渡し、どんな構成にするかをようやく考え出す。

ダルクの人たちの場合は、会った瞬間にそんな喋る過程を飛ばしても「この人たちとなら作品ができる」とすぐ思った。彼らは施設で一日三回、自分自身の話をするという日課がある。それは依存症克服のためで、その日のテーマに沿って話したり、くだらない話の時もあります。話すだけ聞くだけの時間で、誰も応答はしません。誰かに向かって話すのと一人語りの中点のような話し方なんですが、私はここ三年それを見学してきた。毎日自分を見つめ直す作業をしている人たちだから、普段私が必死に探る“ダンスや芝居になる前の部分”を既にクリアしているんですよね。私の作品にとって必要なのは、題材でもテクニックでもなくパフォーマーの「自分自身」。それも特別なことでなく日常の些細なことを、ちゃんと持って来てくれればいいんです。その意味で、ダルクのメンバーは最高の出演者です。

劇場を「誰もが来て・居て良い場所」にするために

白神 倉田さんの演出論、私も共感するところが大きいですが。でも、自分をガードしていたり弱みを隠しながら生きている人は結構多いから、そういう人たちにとって倉田さんはコワイ存在だと、最初は思うでしょうね。

倉田 そうそう、私をコワイと思っている人、結構いるハズ(笑)。でも、「ただ踊りたいんです！」みたいな人は、最近はもう寄って来ません。別に厳しくツラく当たる訳ではないし、「これ以上言うとおつぶれてしまう」と思ったら諦めてしまうんですよ。やりたいこ

との違う人と無理をしても良い作品にはならないから。

白神 akakilike がスタッフだけの集団なのも、そういう倉田さんの考え方から来ているんですか？

倉田 もしダンサーがメンバーだったら、私本当に大事にするし、自分のものにしたいと思ってしまうくらい執着しそうで。だからユニットは自立したプランナーと組み、出演者は作品ごとに募るというやり方が合っていると思っています。

一 白神さんは今作『眠るのが〜』を、東京でご覧になったんですか？

白神 怒られるのを承知で告白しますが、実は作品は未見です。ただ Facebook など倉田さんが京都ダルクに通い、一緒に料理をしたり食事したりする様子が気になって、ずっと見ていたんです。でも京都と東京の初演は拝見できずに終わった。

前後して田上さんと、芸術監督就任後にキラリふじみをどういう劇場にしたいか話し合う中で「誰もが来て・居て良い空間でありたい」というコンセプトが出ていて。そのコンセプトに『眠るのが〜』という作品はピッタリだと思えた。倉田さんもどこかで発言されていたと思うのですが、「ダルクの人たちは劇場に居て、表現してよい存在で、私たちは普通に暮らしていたら知らないという理由だけで依存症の人たちを怖がる。今ここで表現している人たちがどんな人間か、出会って知ることができるのが劇場であり芸術だ」という主旨のことを。それこそ、田上さんと私がキラリふじみという劇場でやりたいことで、だから未見が失礼とは知りながらキラリでの上演をお願いしました。

倉田 いえ、お声がけはいくつかいただきましたが、真正面から上演依頼をくださったのはキラリふじみさんだけで、それがとても嬉しかったです。

「誰もが来て・居て良い空間」ということにも繋がると思うんですが、今、京都で稽古をしていて、「倉田さんの作品に出ている人たち」だから安心してもらえますが、急に稽古場や劇場にダルクの人たちが集団で現れたら多くの方が多少なりコワイとかイヤだと思うはず。もし劇場や芸術に力があるとしたら、同じ状況下で「イヤ」と言わせないことだと私は思うんです。

白神さんが話してくれた「誰もが来て・居て良い空間」、劇場がそういう場所であることは私も賛成だし、すごく素敵だと思う。『眠るのが〜』は私がダルクに出会い、そこに居させてもらうことから始まって、同じようにダルクの人たちにも、私が活動する劇場という場所に来てもらっている、その双方向の関係が大事ななだと思います。

白神 確かに私自身、ダルクがそばにあったら遠巻きにになってしまうかも知れない。でも倉田さんが稽古の状況や、ダルクの人たちの様子を画像で送ってくれますよね？ それを見

るたび段々彼らと距離が近くなっていく感じがするんです。しかもそれは倉田さんの目を通した姿なので、どんどん親近感が湧いてきて、実際に劇場に皆さんがいらしたら「あ、チャルさんだ！」とか舞い上がってしまう気がします（笑）。

倉田 その「私（倉田）を介してダルクの人と出会う」ということに意味があると思っています。実際、稽古場でも私が居ない状態で、ダルクの人と他の出演者が向かい合うことはありません。作中に料理をする場面があり、アタッシェケースから包丁を取り出すんですが、普段からダルクでは、刃物類は鍵のかかるケースに入れて管理されている。それだけ危険のある場所・人であるという一面は、確かにあるんです。作品の中で怖さや危険を強調する必要はないけれど、それらを忘れてもいけないとは、彼らとのつき合いが深まり、クリエーションを何度も共にしているからこそ、自分の肝に銘じていることではありますね。

演出者が出演者と共に舞台に立つ意味

一 田上さんは地域に滞在して、その土地の歴史や風土を題材にしたり、俳優ではない学生や市民と創作することを数多く経験していますが、『眠るのが〜』の創作経緯を聞いてご自身の仕事と重なるところはありますか？

田上 倉田さんの経験や創作と繋げるのは僭越ではありますが、お話を聞いていて、本質では重なるところもあると直感的に感じました。僕は演出家なので市民の方たちと一緒に舞台に立つことはありませんが、倉田さんの創作の場合は作中に共に立ち、表現すること、「倉田さんを介して見せる」ということが重要な気がするんです。タデウシュ・カントール（1915 生～1990 没。ポーランドの前衛芸術家。代表作に『死の教室』など）も出演者と共に舞台に立ち、時に指揮者のように作品や俳優を取り回すことがあったけれど、同様に倉田さんが作品の中に居ることにも大きな意味があると思う。

もう一つ話を聞きながら思い出したのが、宮崎県を拠点にする劇団こふく劇場を率いる劇作家・演出家の永山智行さんが、劇団と並行して創作の場としている宮崎◎まあるい劇場という、障がいの有無に関わらないメンバーで演劇作品をつくる集団のこと。公演を最初に観に行く時、「障がいのある人たちの舞台を観に行く、そのスキャンダル性に対する関心」のような、良くないものが自分の中にあると感じた。でも実際に観た作品にはそんな感情的なバイアスは一切なく、身体やプロ・アマの違いも強調されることなく、ただ一緒につくった時間だけが舞台に乗っていて「これを体験すれば良かったんだ」と腑に落ちた。

『眠るのが〜』でもきっと、その時と同様に目の前で起こることだけを信じて舞台と向き合い、最終的には気持ちも思考も突き抜けて、すべてがフラットになり目を開かされるような体験をさせてもらえるはず。それを、キラリのお客様にも是非一緒に体感していただきたいと思っています。

倉田 さすが演出家！ 仰ることがすごくよく伝わってきますし、私もカントールは好きです（笑）。ただ私が出演者と一緒に舞台に立つことには、ズルい面もある。私に薬物の経験はありませんが、ダルクのメンバーの体験してきたことや世の中に対しての感じ方に強く共感するところがあって。実は作中でも、私自身が一番危なく見えるように構成しているんです。「自分の首も切ってる（犠牲にしている）から、舞台で無茶してもええやろ」的なズルさと言えいいのか、でも同時に「私の作品で出演者が血を流すなら、私が流さんでどうする！」とも思う。ダルクのメンバーには、「私の作品に出てもらうことは、結果的にはみんなを搾取することになる」と伝えてあって、そのうえで出演の可否を判断してもらいました。本当に、一緒に作品をつくりたい人たちと組むために、引き受けなければいけないことは引き受ける、その覚悟は忘れないでおきたいと思っています。

白神 倉田さんと同じ京都の振付家・ダンサーで共通の知人・きたまりさんが、「倉田さんも彼女の作品も、仁義を切っているところがいい」と言っていたけれど、私も同感で、今この話を聞いてさらにその想いが強くなりました。この場合の「仁義を切る」は、「自分の信じるところに真っ直ぐ筋を通す」という意味だと私は考えているんですが、倉田さんのその真っ直ぐさを通して生まれる作品、その熱量を富士見の皆さんにますます味わってほしくなりました。

田上 同感です。

倉田 そう言っていただけるのは、とても嬉しいです。この感染症禍で直接は難しいかも知れませんが、是非、作品をご覧いただいた富士見市民の方々のお話しも聞いてみたいです。

取材・執筆：尾上そら

(2020.12.1.収録)

